

ゼロ記号の諸相と〈排除されるもの〉

大 林 繁 樹

I. 序

〈ゼロ記号〉という言葉ですぐに思い浮かべられるのは、数字のゼロ、音韻論におけるゼロ音素などである。ゼロ記号の簡単な一般的定義を上げるとすれば、例えば丸山圭三郎氏は、「〈ゼロ〉は一つの体系内で〈何か〉と対立する限りにおいて意味を持ちうる」¹⁾ものである、と言う。日常的次元では、選挙の白票、議論における沈黙などがこの〈ゼロ〉に当たるわけであるが、しかしこうした定義は〈ゼロ記号〉の一面を語っているだけで、事情はもっと複雑である。なぜなら、〈ゼロ記号〉は単に二項対立における不在の一項であるだけでなく、構造が想定される形式体系の内を経巡り、構造そのものを成立させる根拠となっているからである。この〈根拠〉は〈不在の中心〉とも呼ばれている。なぜ〈不在〉であるかは後に語るとして、こうしたゼロ記号が、日本で、ゼロ記号の問題をめぐる構造主義批判の形として、一般の目にふれるようになったのは、ここ10年くらいの間と思われる。

この小論では、構造主義について云々するつもりは毛頭ない。ただ、ゼロ記号がなぜ、いかにして生成するのか、その生成のとき何が起きているのか、という一点に関心が向けられている。ゼロ記号は、実体的にどこかにあるものではない。イデア的な存在でもない。人間主体をぬきにしては在り得ないものである。そして、ゼロ記号が生まれるとき奇妙なことが起こる。そのプロセスの考察がこの小論のテーマでもあるが、以下まず始めに、ジル・ドゥルーズの論文に依って、ゼロ記号をめぐる規定を追ってみたい。そして次に、数とし

てのゼロの生成の問題を扱っている、ジャック・アラン・ミレールの論文に依り、〈ゼロ記号〉とその生成によって〈排除されるもの〉とを考察し、最後に、ジャック・ラカンにおける〈主体〉の分裂の理論を考察し、〈ゼロ記号〉のより身近で具体的な相を求めてゆきたい。

II. ジル・ドゥルーズの、〈ゼロ記号〉と 〈空白〉をめぐる所説

ドゥルーズは、『構造主義はなぜそう呼ばれるのか』⁽⁶⁾と題された論文の中で、構造を成立させる三つの要素について語っている。ドゥルーズはこれら三つの要素を説明する具体例の一つとして、ラカンがそのゼミナールで取り上げた、エドガー・アラン・ポーの『盗まれた手紙』に言及している。ドゥルーズの所説を見る前に、次にポーのこの作品の概略をたどっておこう。

作品は主に二つの場面から構成されている。第一の場面は以下のようにまとめられる。

王宮の一室で王妃が一通の手紙を受け取る。この手紙の内容は読者には明確に知らされないが、他人の手に渡れば自分の立場が危うくなるようなものである。王妃はこの手紙を読んでいる。丁度その時、王が部屋に入ってくる。手紙を見られたならば、自らの名誉と安全を失うことになるので、王妃は手紙を隠そうとする。しかし、狼狽しあわてれば、かえって王に気づかれる。王妃はそれで平静を装って、宛名のある方を上にして手紙をテーブルの上に置く。幸いにして王は手紙に気づかなかった。だが他方、こうして王妃が手紙を処置している間に、D大臣が部屋に入ってくる。大臣はすぐその手紙と王妃の少し狼狽した様子に目ざとく気づき、手紙の秘密を嗅ぎつける。彼は事務的な話をしながら、テーブルの上の手紙とよく似た一通の手紙をポケットから取り出し、これを読んでいるふりをしながら、問題の手紙のすぐわきにそれを置く。その後、しばらく話をした後、大臣は自分がポケットから出した手紙ではなく、間

題の手紙を無造作につかんで部屋を出てゆく。王妃はそれに気づいていたが、手紙のことを王に気づかれるのを恐れて、何もすることができなかった。

第二の場面は大臣の家の事務室で展開される。

王妃はパリ警視総監Gに手紙の奪回を依頼する。Gは大臣の夜毎の留守を利用して密かに家を隅々まで搜索するが、手紙を見つけ出せない。Gは困り果てデュパンに協力を依頼する。デュパンは大臣を訪問し、その事務室で大臣と話しながら、部屋の隅々に探りを入れる。その時、彼はマントルピースの中央に吊るされた、安っぽい金ぴか細工の状差しに、忘れられ放置されてあるような皺だらけの一通の手紙に気づき、それが問題の手紙だと確信する。その手紙は外観が問題の手紙と正反対のように偽装されていたが、大きさはぴったり一致していた。

その日、大臣の家を出るとき、デュパンは故意に自分のタバコ入れを置き忘れる。そして翌日、偽装された手紙と外観の同一な手紙をもって忘れものを取りに行き、大臣が窓の外を見ていて気づかぬ間に、手紙をすりかえ、その後平然と大臣の家を出てゆく。

以上の二つの場面を通して、ラカンがゼミナールで語っているのは、各場面におけるそれぞれの行為者の〈間主観性〉の問題と、各人の中心にあり、各人の行動を支配している〈手紙〉の象徴的機能である。この場合、〈手紙〉は特殊な象徴的意味を与えられており、〈主体とシニフィアン〉との関係を解明しなければ了解しがたい。この問題は後に触れるとして、さしあたりここでは、先に言及した、構造を成立させる三つの要素についてのドゥルーズの所説にもどりたい。ドゥルーズは次のように語っている。

「ラカンのもっとも有名なテキストの一つは、エドガー・アラン・ポーの『盗まれた手紙』について注釈を加え、いかにして〈構造〉が、異なった諸主体が場所を占める二つの系列をつくり出すかを示している。すなわち、手紙を見ていない国王——公然と放置してあるだけにいっそうよく隠してあることを楽しんでいる王妃——すべてを見、手紙をもっている大臣（第一の系列）。大臣のところでは何も見出さない警察——公然と放置してあるだけにいっそうよく隠してあることを楽しんでいる大臣——すべ

てを見、手紙をとりもどすデュパン（第二の系列）。」(p. 353)

このようにドゥルーズは、構造が二つの系列から成ることを指摘するが、ここで注意すべきことは、第二の系列の様態が偶然ではないということだ。両系列の両方ともに登場しているのは大臣だけであるが、大臣は第一の系列の王妃がいた場所を占め、王妃の動きを反復する結果になっている。そして警視総監とデュパンは、大臣のこの反復的行為と相關的にその行動を決定されている。また、大臣が王妃の場所を占めるその反復の様態は、ドゥルーズによれば、想像的同一化ではない。

「この二つの系列の相対的な移動はおよそ第二次的なものではない。それは、或る項に想像的な変装をおこなうためのものとして、その項を外側から第二次的に取るようになるのではない。反対に、移動はまさに構造的あるいは象徴的なものである。すなわち、移動は本質的に構造の空間中の場所に属し、かようにして、この場所を第二次的に占めるようになるすべての存在や対象の想像的変装を抑えるわけだ。」(p. 355)

この〈場所〉とは何であろうか。ドゥルーズはこれを他の著作で、〈チェス盤の空いた目〉、あるいは、四角い枠の中での数字の並べかえゲームにおける、一つの空白の仕切りにたとえている^(a)。この空白のおかげで、各々の駒、数字は他の駒、数字との相関において動くというわけである。

『盗まれた手紙』における〈手紙〉は、この空白のようなものであり、構造を成立させる第三番目の要素である。ドゥルーズはこれを「対象X」とも名付けている。ゲームにおける〈空白の仕切り〉、これだけならわかり易いイメージであるが、イメージはイメージにすぎず、対象Xの特性となるとかなり複雑である。

ここで、ラカン自身がこの〈手紙〉について語っている箇所を次に引用しよう。同時にその原文に対する二人の翻訳者による日本語訳をあげておきたい。わざわざ原文と二つの邦訳をあげるのは、そこに解釈の微妙な相違があるからであり、その相違から〈空白〉あるいは〈手紙〉の特性の一端が浮かび上がってくると思われるからである。

「... ce qui est caché n'est jamais que ce qui manque à sa place, comme s'exprime la fiche de recherche d'un volume quand il est égaré dans la bibliothèque. Et celui-ci serait-il en effet sur le rayon ou sur la case d'à côté qu'il y serait caché, si visible qu'il y paraisse. C'est qu'on ne peut dire de à la lettre que ceci manque à sa place, que ce qui peut en changer, c'est-à-dire du symbolique.」^[4]

(下線強調はラカン)

- A. 「隠されているものは、つまるところは図書館のなかで迷っている本とその本の索引カードとの関係のようにその場所に欠けているものでしかない、(...)。そして、この欠けているものもどれほどありありとそこに現われていようと、実際にその区域の内にあるかそれが隠されている所からさほど遠くない仕切りの内にあるのです。そこで、手紙に対しては〔言葉どおり〕(à la lettre) これはその場所に欠けているのだと言えるだけで、これを変化させることのできるものについて、つまりは象徴界について言うことができるだけなのです。」
- B. 「隠されているものは、けっして自分の場所を欠いているものではない。たとえば、本が書庫のなかで見つからなくなっても、その索引カードが示してくれる。そして、後者は、事実、それが隠されている——あまりはつきり隠されているので目につく——こととは別の区域あるいは仕切りにある。つまり、自分の場所を欠いていると文字どおりいえるのは、変わりうるものについて、つまり象徴的なものについてだけだ。」

一読しただけではわかりにくい文章である。Bの翻訳には明らかに誤訳と不明な部分があるが、他方、Aについては、一見正確のように見えるが、例えば原文の二つ目の文章の解釈は、訳文のとおりでよいのであろうか。その二つ目の文章は次のように訳されるべきであろう。

「そして、それ(本)はたとえその本棚の上に、あるいは、となりの仕切りにあるとしても、それは、それがそこにありありと現われていようと、そこに隠されているだろう。」

原文の三番目の文章については、Aの方の解釈で良いであろうが、原文の〈à la lettre〉は、「手紙に対しては」よりも、「文字どおりには」という意味に力点をおき、次にくる中性代名詞 ceci は、単に「それ」=対象X、隠されたもの、と解したい。なぜなら、〈la lettre〉は、ある内容を示す〈手紙〉として

ではなく、内容の不在、空白としての何かを象徴していると思われるからだ。王妃が差出人からの伝言を了解するのは事実であるが、他方、手紙が大臣の手に渡り、利用されぬまま状差しの中に紙屑のように置かれている時、手紙は内容を失い、何かを意味する機能を失っている。ラカンが〈手紙〉の後者の在りように力点をおいている。

以上を総合すると、対象X＝空白＝隠されたもの、の規定は次のようになるだろう。

- (1) それはそれ自身の場所に欠けている。
- (2) それはそこに現前すると同時に不在でもある。
- (3) それについて語り得るのは、それを変えているもの、それを代理しているものを通してだけである。

これらと重複するところもあるが、これに続いてドゥルーズの規定を上げておこう。

- (4) それはどの系列にもとくに属さないが、諸系列の内を動き回る。(p. 356)
- (5) それは探し求められるところには存在せず、逆にまた、存在しないところに見出される。(p. 357)
- (6) それは実体的なものでもなく、自己自身との相似性を欠いている故に、イメージでもない。(p. 357)
- (7) それは空白の仕切りから区別されず、いつでも移動するそうした場所に属している。(p. 358)

対象Xは、全く面食らうような奇妙で矛盾した対象だ。この上さらに抽象的な規定をとりあげても、対象Xについて明確なイメージができるとは思われないので、さしあたりここで、対象Xと関係していると思し得る（対象Xそのものではない）具体例として、ドゥルーズがあげている例のいくつかをまとめてみよう。

- (1) シェイクスピアの『オセロ』の中を循環し、この戯曲のすべての系列を巡るハンカチーフの存在。

- (2) ミシェル・フーコーの『言葉と物』の始めの方で言及されているヴェラスケスの絵における王の位置。
- (3) レヴィ＝ストロースが、贈与における〈ハウ〉、すなわち、返礼せずにはおれなくさせるような贈り物に宿った力、にみとめた象徴価値ゼロとしての〈浮遊するシニフィアン〉。
- (4) ヤコブソンのゼロ音素。つまり音素の不在を妨げることを固有の機能とするもの。
- (5) ルイス・キャロルやジョイスにおける〈カバン語〉、〈秘教的な語〉。

これらの例について、ドゥルーズは簡単に列挙しているだけで、具体的な分析は示されていない。従って先に見た、対象X、空白、についての抽象的な規定以上に理解が進むわけではない。それでも、さしあたり次のことは確認しておきたい。

空白の場所については、「実在物によるすべての二次的充填あるいは占有に先立って、象徴による第一次的充填がある。ただ、空白の仕切りの逆説が見出される。なぜなら、このものは、たとえ象徴的要素によるにせよ、充たされることもできなければ、充たされるべきでもない唯一の場所だからである。(…)象徴的なものとして、そのものは自己自身に対してその固有の象徴でなければならず、永遠に自己自身の半身——やってきて空白を埋めることのできる——を欠いたままでいなければならない。」(p. 364)

こういう次第で、空白、対象Xと、それを占めるものとは区別され、我々の言うゼロ記号とは、この後者に当たるものである。ところで、対象Xのさらに具体的な様相を求め、それがなぜ、いかにして在るのかを探るために、ここでドゥルーズの著作を離れ、彼が次のようにごく簡単に触れている、ジャック・アラン・ミレールの論文の検討に移りたい。

「J・A・ミレールは、構造論的あるいは換喩的因果性の概念をつくり上げる努力のうちで、フレーゲから自己同一性を欠いているものとして定義づけられる〈ゼロ〉の位置というものを借りた。これは数の系列の構成の条件になるものである。」(p. 359)

Ⅲ. J・A・ミレールによる、〈ゼロ記号〉と 〈排除されるもの〉

ミレールについて簡単に紹介しておく、ラカンの愛弟子で、師の衣鉢をつぐ第一人者として、現在ラカンの遺作、講義などの整理編集とその教授にあたっている。ここで扱うミレールの論文は、『La Suture』と題されている。Suture とは外科用語で〈縫合〉と訳され、傷、裂開を取り繕うことである。論文では、〈主体〉の裂開を取り繕うもの、と比喩的に用いられている。

ところで、ミレールはこの論文で、〈主体〉の分裂について語るというよりも、その大部分は、数学における数ゼロ（ゼロ記号）が意味するもの、計算において場を占める0記号が生まれた時、あるいは発明された時、何が起きているのかという考察に当てられている。構造の概念が、数学において初めて生まれたことを考えれば、0記号の考察は何も突飛なことではない。

以下、ミレールの論文を見てゆきたいが、少し先まわりして言うておけば、そこで出てくる〈欠如としてのゼロ〉、〈数としてのゼロ〉に対しては、先に見たドゥルーズによる対象Xの規定を念頭においておくとうわりやすいだろう。つまり、空白とそれを占めるものとの関係。

まず始めに、ミレールは0記号の歴史的由来について語っているのではないことを言うておこう。0記号の起源については、それが6、7世紀頃インドで、〈位取り記数法〉として、つまりソロバンの空いた場に記入する記号として生まれたことを知ればここでは充分だろう。0記号は、例えば150、105、15などの相違を設けるために、空いた場に記された記号であった。

だが、この0が負数の発明とともに算術の世界に入ると絶大な力を発揮する。現在では0なしの計算など考えられもしない。しかし、この数としてのゼロはよく考えると奇妙なものだ。一般にゼロと言え、何かがない、ことを意味するが、この〈無い〉は〈有〉に対する〈無〉にすぎない。二項対立におい

てしか意味をもたない。あるいは、例えば、逆風に向かって進もうとしているがストップしている船のようなものである。この場合、推進力と風力とは、差引きゼロであるが、このゼロは何もないことではあるまい。プラスとマイナスとの間の境界がある。一般に数学の定義においても、数ゼロは中性的要素、境界点である。

ミレールは、数ゼロが純粹に論理的な次元で、そのイデアルな実在性を獲得するとき、何が起っているのかについて次のように語っている。

「論理のそれ自身による自立的構成において、現実へのあらゆる照合を排除するために、概念の次元で、〈自己に非同一な一つの対象〉を思い浮かべ、次にそれを真実の領野から排除することが必要だったのです。数の場に記入される0は、そうした対象の排除を完遂するものです。包摂によって描かれるこの場所、そこでは対象が欠けているこの場所については、何もそこには〈書き〉えないであろうし、たとえそこに一つの0を描かねばならないとしても、それはそこに〈空白〉を形に表すため、欠如を目に見えるようにするためにすぎない。

欠如としてのゼロから数ゼロまでの間に、概念化不可能なものが概念化されるのです。」⁽⁵⁾

引用文中の〈自己に非同一な一つの対象〉とは〈欠如としてのゼロ〉であり、概念とは、それに帰属する一つの対象があるものであるにもかかわらず、そうした対象を欠いた概念（自己非同一な概念）という矛盾したものである。そして「真実の領野」とは、イデアルな数学的実在の世界であり、そうした領野から論理の一貫性を救うために、〈欠如としてのゼロ〉が排除される。そして排除された瞬間、それに代わって、いわば自己自身を対象とする概念、すなわち0記号がおかれる。対象のない〈欠如としてのゼロ〉から、対象、すなわち境界点という対象があるかのように作用する〈0記号〉への移行という逆説がここにはある。ミレールの言葉を借りれば、一つの数として解されるゼロとは、「一つのモノのようなものであり、〈思考において最初の非現実的なモノ〉である。」⁽⁶⁾

ミレールのこうした論理展開に対して我々は眉に唾をつけねばならないだろ

うか。確認のため、少し回り道になるが、ここで〈数ゼロ〉について思索している他の人々の考えを見ておくことは必要であろう。例えば、数理の専門家、永井博氏は次のように書いている。

「ゼロは、通常の実存概念からすれば〈存在〉というべきものではない。数1と具象的な〈一つのもの〉との間にはなおある種の関連を見出すことができるが、数0に対して何かある具象的なものを見出すことは不可能であろう。それにもかかわらず、数学的思惟はこの空を積極的に形成し、これを数学的存在として定着せしめる。しかしこのとき、いうところの数学的存在とは何か。

0は上のごとく、それに対応するいかなる具象的なものをもたないから、それからの抽象によって成り立つとはいえない。この点では、事情は自然数の場合と全く同じではない。故に、ある概念がいかなる具象的対応物をもたないときこれをフィクションとよぶならば、ゼロはフィクションの性格をもつ。」⁷⁾

この後、永井氏は、数ゼロはフィクションであるにもかかわらず、現実世界に 응용できる実数の体系を導く出発点となっている、という奇妙さを述べている。そして、「空の存在性は、それ自体として何であるかは我々には知られない」けれども、数ゼロは、「空の何らかの存在性の表現であるとしなければならない」と述べている。

「空の存在性の表現」とは矛盾ではなかろうか。これはミレールの言う、〈欠如としてのゼロ〉から〈数ゼロ〉への移行にある逆説と同類のものと言えるだろう。

次にもう一人、数学に詳しく、ゼロ記号、あるいは〈無限〉に関する鋭利な思索を核に、説得力ある思想を展開している柄谷行人氏の所説を見てみよう。引用はいつでも結論的なものばかりであるが、さしあたりはそれで充分と思う。

「言語について考えるとき、我々は通常対象（物）に関係づけてしまう。ところが、言語の一方の極限である数学を例にとると、そうはいかない。数学的对象が実在していて、数学者はそれを探究し〈発見〉するのだと考えるプラトニズム（ほとんど実際の数学者はそう信じている）を受け入れないとすれば、数学は、いわば規則を〈発

明〉する実践的な過程にはかならなくなる。』^[8]

「数学の危機は、無限遠点であれ無限集合であれ、〈無限〉を実存として惜定したことにはじまっている。彼（ウィトゲンシュタイン）は、〈実無限〉という考え方、というより、そもそも数学の対象が存在するという考え方に反対する。カントにとっても、フレーゲにとっても、数学は万人が承認せざるをえない存在である。しかし、ウィトゲンシュタインにとって、数学は言語ゲームであり、言語と同様に、アイデアであれ対象であれ、その対象物をもたない。』^[9]

こうして見てくると、ミレールの言う〈欠如としてのゼロ〉と〈数ゼロ〉が問題にされる巨大な文脈が明らかになったことと思う。と同時に、ミレールの所説を否認することはできない、と言わねばならない。ここでミレールの言う、上の二つのゼロについてまとめてみよう。

- (1) 欠如としてのゼロとは、対象を欠いた矛盾的概念であり、概念化不可能なもの、そこには何も書き込み得ない空、名づけ得ぬもの、である。永井氏が指摘するように、それはただ単に、それについて何も言えないとしか言いようのないものである。
- (2) 数ゼロとは、上の〈空〉を形に表すと同時に、そのこと自体によって〈空〉を排除したものである。形に表すとは、概念化不可能なものが概念化され、一つの虚構的存在となり、思考において最初の非現実的なモノとなる。そして、それは一つの境界点があるかのように作動する。数ゼロはいわば、或る透明体の影という在りえない逆説的存在、あるいは、切断されたメビウスの輪にできる境界と言えよう。

さて、ここまでくると、ドゥルーズによる対象Xの規定に、いま見てきた〈欠如としてのゼロ〉と〈数ゼロ〉との関係を当てはめてみれば、対象Xの姿がより明瞭になってくると思う。対象Xの規定に従って順に、その規定を二つのゼロ概念を使って言いかえてみよう。

- (1) 〈欠如ゼロ〉は〈数ゼロ〉に欠けている（排除されている）。
- (2) 〈欠如ゼロ〉は〈数ゼロ〉に現前すると同時に不在でもある。
- (3) 〈欠如ゼロ〉について語り得るのは、それを代理しているもの、つまり

〈数ゼロ〉を通してだけである。

- (4) 代理としての〈数ゼロ〉は数の諸系列中を動き回る。
- (5) 〈欠如ゼロ〉は探し求められるところには存在せず、逆にまた、存在しないところ(〈数ゼロ〉)に見出される。
- (6) 〈欠如ゼロ〉は実体的なものでもなく、イメージでもない。
- (7) 〈欠如ゼロ〉は〈数ゼロ〉から区別されず、いつでも移動する〈数ゼロ〉の場に属している。

こうして対象Xの輪郭はかなり明瞭になったと思うが、ドゥルーズの論文ではこうした分析は省略され、背後に隠されてしまっている。ところで、ドゥルーズもミレールも、対象Xとか0記号をもち出してそれで抽象論議をするためではない。彼らは、文化の諸現象における〈主体〉と象徴との関係の母型を、〈欠如ゼロ〉と〈数ゼロ〉との関係の在りように求めているのである。ミレールはこう語っている。

「もし数の連続のメンバーたる数0が、表象と排除という、代わる代わるの動きの下で運び去られる不在(絶対的ゼロ)を取り繕う代理の場にすぎないならば、ゼロと数の連続との間の復元された関係の中に、主体がシニフィアンの連鎖と取り結ぶ最も基本的な関係を認めるのに、どんな不都合があろうか。」¹⁰⁰

引用文中の「表象と排除」とは、〈欠如としてのゼロ〉を〈数ゼロ〉とすること、空白を形に表すことであり、と同時にその瞬間、〈欠如ゼロ〉は排除されるということである。こういう次第で、〈欠如としてのゼロ〉は〈主体〉(この主体は、いわゆる意識的主体ではなく、それ以前の、言語以前の何かである)と同質のものと見なされる。そして、数ゼロを含む数の連続は、シニフィアンの連鎖と同質のものと見なされる。

対象Xはこうしてかなり具体的な様相をもつに至ったと思うが、ここでミレールの論文から離れて、〈主体〉とシニフィアンとの関係の検討に移りたい。これによって、構造の要となっている0記号を支えているもの、つまり対象X、欠如としてのゼロが、さらにもっと身近な具体性をもってくるだろう。

IV. J・ラカンにおける〈主体〉の分裂

〈主体〉とシニフィアンの検討にいきなり入る前に、ラカンの思想における、幼児と言語との関係を一瞥しそれを素描しておこう。そこから自ずと〈主体〉の問題は見えてくるだろう。

言葉の習得に関する一般の見方とラカンの見解との間には大きな違いがある。一般には、幼児にとって言葉の習得は、家族、社会の一員として自立し成長してゆく上で不可欠なものであり、また、習得された言葉を通して幼児は、自己の欲望を他者に伝え実現してゆくと考えられている。しかし、ラカンによれば、こうした欲望とは、幼児に本来的な欲動の回路からすでに大きくずれ、その代理物でしかない。言葉によって生まれ、言葉によって実現されてゆく欲望は、一般的には母親との一体化という幼児の原初的な欲動から遠ざかり、それが排除され変形されたものである。個人の社会化とは、こうした欲動の世界からの分裂であり、言葉がこの分裂の最初の契機となる。言葉以前の混沌たる、〈名のない〉世界に生きていた幼児は、言葉の習得によって象徴界（言語秩序）の歯車の中に引き込まれてゆく。その過程は、いわば〈名のない私〉と〈名による意味としての私〉とが無限に分裂してゆく過程でもある。

こうした事態を象徴的に示す例として、しばしば言及される一つの例が思いだされる。それはフロイトによって観察された、生後1年6ヶ月の幼児による糸巻き遊びの例である。この幼児は、母親の不在中、ひものついた糸巻きを視界から消える所に投げては、「Fort」（いない）を意味すると解される「オーオー」という叫びを発し、糸巻きを引っぱってこれが姿を現すと、「Da」（いた）と叫び、くりかえし遊んでいた。この遊びは、母親の在、不在を糸巻きの在、不在に置き換え（象徴化）、母親の不在に耐え欲動の充足を断念するものと解されている。幼児はこの象徴化によって、その真の欲動を、その真の目標から他の異なった目標へずらし、こうしていわば主体の知らぬ間に、〈名のない私〉

は抑圧され排除されるわけである。

ところで、〈主体〉とはこうした〈名のない私〉である。他方、幼児につけられた名前、あるいは幼児によって自己を指示するものとして了解される名前とは、象徴的秩序の内に設けられた一つ場であるが、〈名のない私〉はほとんどそこに入りこむ余地がない。一つの名、あるいは象徴とは、象徴されるものとは別のものであり、そうした関係が象徴の動かしがたい成立条件となっている。一般的に言えば、これは、名をつけられたモノが言葉ではとらえきれないのと同様である。例えば、〈雪〉を知らない人がその意味を求めるとすれば、そして一冊の辞典以外にそれを知る手段がないとすれば、彼は辞典を一巡するだろうし、それでも〈雪〉はつかめきれないだろう。たとえ〈雪〉を経験的に知っていても、事態は似たものとなる。

〈主体〉の原初的分裂についてラカンが語っているところを見てみよう。

「シニフィアンの領域は、あるシニフィアンがもう一つのシニフィアンに対して主体を代表するということによって、成立するのです。これが、夢、言い間違い、機知など、すべての無意識の形成物の構造です。そして、それはまた、主体の原初的分裂を説明する構造でもあります。いまだ位置の決定されていない（大文字の）〈他者〉の場で生じるシニフィアンが、そこに、いまだ言葉をもたない存在から主体を浮かび上がらせますが、それと引き替えにこの存在は身動きできないものにされてしまいます。今にも話すばかりになってそこに存在したものが（...），もはや一つのシニフィアンでしかないことによって消え去ってしまうのです。」¹⁰

引用文中の、「言葉をもたない存在」から浮かび出る主体とは、その出現の瞬間からしてすでに、〈名のない私〉、つまり真の〈主体〉のいわば影にすぎない。〈主体〉はその代理の名、〈私〉とか〈彼〉と名づけられることによって、その瞬間そこから消え去るのであり、あるいは、〈私〉を主語とするシニフィアンの連鎖から消え去るのである。

上に見てきた事態は、幼児が象徴的秩序に参入する過程における原初的様態にすぎないが、この小論ではそれだけで充分であろう。

ここでラカンから少し離れるけれども、名づけられることを嫌う、境界例の

患者の例が現実にあるので、それについて少し触れておこう。それは木村敏氏が季刊誌『思潮』(1988年, No. 2) の共同討議で話している例である。その患者は、自分が一個の可視的な、実体的なモノであることを非常に嫌悪し、自分の名前を呼ばれることを極度に恐れるのである。鏡に自分の姿を見ることも嫌悪している。かといって、自分が全くの無に帰すのを望んでいるわけでもない。というのは、目に見える他人がすべて自分に見えて、自分がバラバラになって、世界中に拡散してしまって、どこにも居場所がないことを非常に嘆くからでもある。相矛盾する悩みをもっているわけだが、この患者にとって、自分が一番居心地よく感じられる場所は、新幹線の指定席、つまり無名の中性的な場であるらしい。

木村氏によれば、この患者が名前を呼ばれることを嫌うのは、「自分が自分にとって他者であることを恐れている」からである。木村氏は、人が「私」と言うときそこには、〈名指している自分〉と〈名指されている自分〉があると云う。この二つの間には距離がある。だがこの場合、〈名指している自分〉とは何か? 「名指している自分」というものが別個にあるのではなくて、そこにそのつど発生する一つの距離、あるこは差異といってもいい、名指している自分と名指されている自分との差異、これが実は〈名指している自分〉の正体なのではないか⁹⁹、と木村氏は他の本で述べている。差異とは、異なった二つのものの比較から生じるが、この場合、〈名指している自分〉とは、差異を生む二項の片方として実体的に在るわけではない。それは、差異を生む作用自体である。木村氏は、〈名指している自分〉を強いて表象すれば、〈根源的な場所〉、〈根源的自発性〉、〈宇宙的生命〉であると語っている。最後のは、説得力をもつが、かなり神秘的なものである。

ここで前に検討した、対象X、欠如としてのゼロの問題にもどりたい。この二つの諸特性の照応する様子についてはすでに述べたが、それらの諸特性は、ミレールの言うように、〈主体〉と象徴界との関係についても当てはまると言える。前に〈欠如ゼロ〉と〈数ゼロ〉との関係を規定したと同様に、〈主体〉と

象徴界との関係を規定してみよう。

- (1) 〈主体〉は象徴界の場に欠け、排除されている。
- (2) 〈主体〉は象徴界に現前すると同時に不在でもある。
- (3) 〈主体〉について語り得るのは、それを代理しているもの、つまり象徴界を通してだけである。
- (4) 代理としての象徴（名をもつ私）は、象徴の諸系列中を動き回る。
- (5) 〈主体〉は探し求められるところには存在せず、逆にまた、存在しないところ（象徴界）に見出される。
- (6) 〈主体〉は実体的なものではなく、イメージでもない。
- (7) 〈主体〉は象徴界から区別されず、いつでも移動する象徴界の場に属している。

V. む す び

ドゥルーズ、ミレール、ラカンの諸論文を通して、我々は次のような、互いに同質なもの二つのグループを取り出すことができる。

A. 対象X——欠如としてのゼロ——〈主体〉

B. Xの場を占めるもの——数ゼロ——〈名をもつ私〉

ゼロ記号と一般に呼ばれているのはBに当たるものであり、上に見てきた例以外のものを上げるとすれば、例えば、経済学では近代における貨幣をゼロ記号として扱っている。つまり、商品を価値づけ、商品の総体を包括するメタ・レベルにありながら、自らも一商品としてオブジェクト・レベルを動き回る貨幣、というゼロ記号。前に引用した柄谷氏によれば、こうしたゼロ記号を想定する構造主義の構造は、安定するけれども、〈中心のない関係の体系〉を求める構造主義の前提に反すると言う。なぜなら、ゼロ記号は今まで見てきたように、空いた場を占める、あるいは空白にやってくる、諸系列の諸要素をまとめる虚構的中心だからである。それは、どこかに固定的に在るものではなく、も

ともどこにもないものという意味で、〈不在の中心〉である。そして、もともと虚構的であり不在であるものとして、それはパラドクスをはらみ、いつかはその矛盾を露呈する。他方、今までの考察で明らかのように、空白、すなわち〈欠如としてのゼロ〉にしる〈主体〉にしる、象徴的秩序においては奇妙な在り方をするものの、それ自体は名づけようもない対象、ただ単に〈空〉と言うか、あるいは〈カオス〉と名づけるしかないものであった。何らかの根拠をそこに見ることはむづかしい。

最後に、この小論で我々が確認しておきたいのは、〈欠如ゼロ〉から〈数ゼロ〉へのプロセスに見られるような、〈空〉と〈ゼロ記号〉とのひらき、あるいは〈ゼロ記号〉によって否認、排除された〈空〉である。この排除、ひらきにおいて、大袈裟に言えば、現代文明・文化のすべてが生まれているわけである。〈空〉、あるいは、排除とひらきをどう捉えるかによって、各人の思想は全く異なってくるだろう。その考察はこの小論のテーマではないので、ここで本稿を終わりたい。

注

- (1) 今村仁司編『現代思想を読む事典』、講談社現代新書、1988、p. 378。
- (2) 『シャトレ哲学史Ⅷ〈20世紀の哲学〉』、白水社、1975、pp. 332-371。
- (3) Gilles Deleuze『意味の論理学』、法政大学出版局、1987。
- (4) Jacques Lacan『Ecrits』、Edition du Seuil、1966、p. 25。
- (5) Jacques-Alain Miller『La Suture』in Cahier pour l'analyse、1966、p. 44。
- (6) ibid., p. 44。
- (7) 永井 博『数理の存在論的基礎』、創文社、1961、p. 21。
- (8) 柄谷行人『探究 I』、講談社、1986、p. 58。
- (9) ibid., p. 180。
- (10) J.-A. Miller『La Suture』p. 47。
- (11) J. Lacan『Ecrits』p. 840。 ラカンにおけるシニフィアンの定義は、ソシュールのそれとは異なっている。ラカンの場合、例えば道路標識のように、文脈なしにそれ自体で固定した意味をもつものは記号 (Signe) と呼ばれ、この場合シニフィアンとシニフィエは癒着している、とされる。他方、上のような記号ではない意味するもの

(シニフィアン)は、例えば日本語の「はし」のように、それ自体では意味をもたず、文中の他のシニフィアンとの前後関係によってシニフィエが決定されるもの、とされる。この場合シニフィアンとシニフィエは分割されており、ラカンではこの分割線が大きな意味をもち、精神分析の場において患者は、その症候の特殊な主体的意味(シニフィエ)を自分自身でそのシニフィアンの連鎖から求めねばならない。

- (12) 木村 敏『私は本当に私なのか』, 朝日出版社, 1983, p. 44.

(文学部非常勤講師)